DQNネームを付けられた私

幻想的な人間

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

子供のころ私はアイドルみたいな存在だった。
なぜなら、私の名前が輝手意（キティ）だからだ。
小学校、みんなから珍しい名前ときれいな服を着ていたという理由で、もてはやされていた。
とてもいい気分だ。
だけど時がたち中学生。
私は名前を理由にイジメの対象にされる。

注意

この物語はすべてフィクションです。実際の人名とはなにも関係ありません。また作者はハローキティのアンチでもありません。そして、現実問題こんな名前がついている方を見かけた場合、イジメるのではなく、助けることを考えてください。

目　次

ＤＱＮネームを付けられた私　――　1

ＤＱＮネームを付けられた私

私の名前は山田輝手意（キティ）。今年で２０歳になる。

名前の由来は、輝くその手に意思をつかんでほしいから。というのが父親の言葉。

だが、実際には母親が他の人の意見を無視して、キティちゃんと呼びたいからカタカナで書いたら、母方の祖父が漢字に直して届をだしたのだという。

それいらい、母親は母方の祖父と疎遠になったらしく、私は一度しか祖父の顔を見ていない。

父親は何も言わなかったらしく、祖父から、名前の漢字の由来だけを聞いたのだ。

この年になっても私は母親に聞く。

「なんで私はハローキティと一緒の名前なの？」

すると決まってこの返事が返ってくる。

「だって、かわいいじゃん!!」

そして、私は今、右手の包丁を母親のお腹に何度も何度も刺していた。

血の泡を噴きながら何でというような顔で私を見つめる母親。

死んで当然だ!!!!!
なんでそんな不思議そうな顔をする!!!
私はこの名前でひどい人生を送ってきた!!!!!!
お前みたいな母親がいたせいで私はこんな最低な名前で生まれてきたんだ!!!!!!!!!!

お腹だけではなく、胸も、足も、腕も、顔面も、突き刺し続けた。顔面はすでに原型をとどめてはいない。それでも刺し続けた。

正気に戻ったのは父親が部屋に入ってきた時だった。
「輝手意・・・おまえ・・・」
父親は驚きを隠せなかったが、どこか、ああ・・・やっとか、というような顔で私と母親を見ている。
「ごめんな・・・俺が不甲斐ないばかりに。」
「・・・・・・・」
「・・・俺は刺さないのか?」
「・・・・・・・」

「お前の名前を黙認したんだぞ。」
「・・・死にたいの?お父さん。」
ふと、父親をみると。まるでいつもとは別人の父親の印象に私は感じた。
そうか、お父さんはダメだとはわかってたんだ。けれど、お母さんとの仲を切れさせたくないから我慢したんだね。
「そうだな・・・・・・思えば、それだけだなお前に謝れる方法は。」
そういうと、父親はビンを取り出す。
「ごめんな・・・」
土下座をして、ビンの液体を飲み干す。全部飲み干すと同時に父親は、眠るようにその場に倒れた。
毒を飲んで死んだ父親を見下ろすと私は自室に戻った。
血まみれの服を他の服に着替えると、机に座り遺書を書き始める。
いや、これは自分勝手なことなのだろう。怒りに任せて行ったことと、自分勝手なお願いごとを書くと、私は包丁を自分のお腹に刺した。
目をつぶると、いろいろと思い出してくる。どれもこれも、最悪な思い出だ。

「はじめまして。やまだきてぃといいます！」

小学校の時、私はアイドルのような存在だった。名前もそうだが、来ている服がかなりキラ付いた服だったのだ。

みんな笑いながら接してくれたいい時代だった。

中学に上がるとき父親の仕事の都合で転校することになった。
みんなと離れるのは少し悲しかったが、自分の名前ならどこでもやっていけると思った。

しかし中学に上がった瞬間。私は名前を理由にイジメを受け始めた。
最初のころは簡単な嫌がらせだった。鉛筆を盗られたり、押されたりされた。
その時のイジメ側の決め台詞はこうだった。

「中学になってキティとかダサすぎ～ｗ。そもそも全然可愛くないしｗ。チョーキモ～イ!!ｗとっとと死んじゃえばｗ?」

当時の私は恥ずかしくて自分の名前が理由でいじめられているなど先生には話せなかった。
徐々にエスカレートしていって、学校の掲示板にキティがバラバラになった写真を張られたり、鞄がどこかに盗まれたり、あこがれの男子からもキティがうざいと言われた。

そして最後には私の顔写真と名前をネットに晒したのだ。
結局晒したのがばれてイジメ側は退学処分にされたのだが、私は心を完全に砕かされてしまった。

勿論、この間も母親に名前を変えてと頼んだが可愛いの一点張りでかえさせてくれなかった。あまり強行手段を取りたくなかったし、当時知識もあまりなかった私は、一年休学する形で高校に入学した。
高校ではさらにひどくなった。
ネットで晒された情報を知っている人間がいたのか、私の復学一日目からイジメが始まった。
中学の頃では想像できないイジメを体験した。廊下を歩くと
「邪魔だよＤＱＮネーム！」
と言われて肩をぶつけられたり。
「うわキモｗ。名前がキティなんだってよｗ」
「本人の顔と本物比較しろよｗ人外という部類ではあってるかもだぜｗ」
「あんなんでよくまた学校にこれたよねｗ」
陰口が聞こえるように言われた。

そして、一番応えたのがテストで一位をとった時だ。
私をイジメていた人たちがさらにイジメをひどくしてきたのだ。
キャットフードと、猫缶を投げつけられたり、泥水をかけらたりされた。
そして、廊下を歩くと無限ともいえる時間の陰口をたたかれたのだ。
「猫の癖によくテスト一位になったよねｗ」
「どうせカンニングしたんでしょｗ」
「猫のやりそうなことだよなｗ」
「キモイ猫の癖にウザいんだよｗ」
「死んじまえばいいのにさｗ」
私はなにもかも信用できなくなってきた。母親になんどもなんども頼んだ。名前を変えてくれと。改名してくれと。しかし彼女は何も知らない顔で笑いながら言うのだ。
「嫌よ。だって、かわいいじゃん!!」
精神的にもまいっていた私は大学ではなくて就職活動をした。
しかし、どこの職場も名前を見ると笑い出す。

どこの職場も名前を聞くと見下してくる。
どこの職場も名前を知ると仲間がいなくなる。

そして、誕生日である今日。
私は母親を殺した。

遺書には、私のその経験を書いて、自分勝手なお願いを書いた。
どうか、私の名前を変えてください。それだけが私の希望です。